

看松月寺花

古寺有春意。風香一樹花。空庭人不見。窗外茶烟斜。常磐なる松にまじりて咲く花は散る事しらで春や過さん

一、普明院宮御賀と遺偈

享保八年正月十六日、普明院宮九十歳御賀

仙洞より御杖など被進候。御製

老の坂こえ残すなよ百年のはるも手にとる杖にまかせて

院宮御歌

ながらへていまぞ嬉しき我よはひ九十をば君にゆづらん

仙洞御返歌

ゆづるてふ君がよはひをためしにて九十をば我も保たん

享保十二年十月六日、林丘寺普明院宮薨逝九十四歳。

御遺偈あり。

老不至筆。臨死無苦。事足願成。幻齡任數。

六十五歳の御時自畫自讃

後の世に誰みむ人はあらずとも語らんとならば一言もがな

一、青地兼山の東都紀行

兼山君丙戌歳東都紀行の内 享保三年

關川のあたり過けるに紅葉の散りければ

守る人もいかに見るらん夕あらし關吹き起る峯の紅葉を

おなじわたりにて紅葉の流るゝを見侍りて

瀬を早み紅葉の錦これもまた岩にせかれて申絶えにけり

臯月の比猿丸の宮にまうで侍けるに、かの奥山の歌を

おもひ出で侍りて 享保八年

鳴鹿の聲聞かまほし麥の秋

一、新井白石門下の歸泉を悼む詩

今茲癸卯夏、新井白石氏弟子歸泉を聞て、山本基庸弔慰の

ついでに「なき魂の行衛てらせど飛螢」と申つかはしける

答書に

落月下庭除。飛螢點々疎。窓間人不見。猶照架頭書。

一、源頼朝の天野遠景に與へたる書

伊豆の藤内遠景は、奉公他に異成間、いかなる不審ありと

ても、頼朝十代遠景十代科に行ふべからず。是は不便に思

召すがゆゑなり。

頼朝

伊豆藤内遠景殿

右頼朝の書、長大隅守家臣所持。今在公庫中。

一、山鹿甚五左衛門の御預

山鹿甚五左衛門と申牢人、淺野内匠殿へ御預、甚五左衛門

父母・妻子も、内匠殿へ被成御預候。甚五左衛門と父母妻

子、二所に置候事無用と被仰渡候。内匠殿知行所の内、三所

に禁籠の由に御座候。右の様子爰取沙汰に御座候て、兩

々不知申候様子、前田帶刀殿御屋敷へ御出で御物語りに御

座候。肥後守様并御老中被仰立候は、今度聖教要録とやら

ん申し甚五左衛門作候書物、板行仕り弟子中へ遺候。其書

に曾子より朱子迄誹謗仕、三千載不傳の道は我有と書申候。

其上事の外成勝手貯御座候。弟子二百人斗不斷出入仕候。

右の跡の者に候へば、如何様なる儀可仕も不知曲者に付、

御預の由御座候。恐惶謹言。

十月十三日

脇田九兵衛

前田對馬様

奥村河内様

一、定家卿筆の和歌

卅六の

左

よもすがらのちの假寝の床さえて月ふく風に霞ふるなり

右勝

霞ふるみやまのさとに誰か又こよひねざめの心しるらん

又左をいかにとは見侍れど

こよひねざめの心しるらんれいの

□□まさりてはいかでか侍べき

右定家卿筆本紙、村上傳右衛門家に有之。

土屋相模守殿所持、定家卿筆、爲家卿へ教訓の歌の由。

年を経てかつは身のため家の風吹つたへたる和歌の浦波

相州君へ懸物御返しの時 通 躬 卿

今もその流れを汲めば我家にかけても見ばや和歌の浦波

一、權中納言爲久の和歌

權中納言爲久

將軍家の仰ごとありて、先祖黃門の長歌・短歌の事を

くはしく筆しおかれたる一帖を、家にをさむべきよし

にて、下し賜りぬるかたじけなさにより、おもひを述